**読書ノート(余興)**

令和元年9月25日　小林

**半藤一利・保坂正康「総点検・日本海軍と昭和史」(毎日新聞社、2014年2月)**

* 本書は半藤・保坂の対談。長くお蔵入りになっていた海軍関係者の証言集が2010年に刊行され、半藤・保坂はこれを読んだうえで対談した。以下に、私が興味を持った部分のみ記します。
* 1941年9月の日本軍の南部仏印(ベトナム南部) への進駐が米国をして対日戦やむなしとの意思を固めさせたターニングポイントだった。当時、米英蘭は対日石油輸出禁止等の経済封鎖をしていたが、南部仏印進駐はこの経済封鎖を武力で突破する意図ありと米英蘭には映った。なぜなら、その南のインドネシアには石油がある。(なお、日本軍はドイツ占領下の仏政府の了解のもと進駐した。)
* 真珠湾攻撃のときの米国大使は海軍出身の野村吉三郎大将、米国着任は1941年1月。近衛首相・松岡外相の対米交渉が行き詰まっていた時でした。野村は軍縮交渉などで当時のルーズベルト大統領等とも面識があり適任と考えられていたが、野村は大使館職員に総スカンを食っていて、日常業務に支障が出ていた。その背景は、松岡がおこなった大規模な更迭人事に反発して官僚はサボタージュをしていたこと、および野村は外務省出身者でなかったための反発がある。実務に支障をきたした野村は個人的に日系人を秘書に雇い米国政府との連絡等をやらせていた。宣戦布告文のタイプが遅れたのは、日曜日であったこと、暗号解読に時間がかかったことがあるが、基層部分には野村に対し大使館職員がサボタージュしていたことがあるとのこと。
* 近衛首相は、対米交渉に行き詰まり1941年10月総辞職するが、その直前の8月から9月にかけてルーズベルト大統領との直談判で一気に交渉妥結に持ち込もうと考え会談を申し入れ、会談場所もアラスカ州ヂェノアと決まっていた。近衛は、直談判で中国撤兵を呑んで、天皇へ直接電報を打って裁可を得てしまおうと考えていた。ところがルーズベルト大統領は、ハル国務長官の入れ知恵で四原則（主権尊重、内政不干渉等）に同意したうえでないと会えないと通告し、結局会談は実現しなかった。
* 近衛内閣ののち東条内閣が誕生するが、その誕生ウラ話が興味深い。

(1)後継首相は、近衛も東条もその他も東久邇宮（天皇の家系、陸軍大将）が適任と考えていた。東久邇宮は天皇と陸軍の両方の立場を持つ人なので中国撤兵問題をうまく処理できるだろうと期待されていた。ところが、重臣会議で木戸内大臣が、「東条は天皇のお言葉があれば米国と戦争を起こすことはない」と保証したので、他の重臣は不承不承、東条後継に賛成した。

(2)東条に大命降下のお召がかかったとき、東条は軍務局員に「天子様から支那撤兵を考慮せよと言われたら、自分はどんな理屈も述べない、述べるつもりもない」と言った。実際、天皇から対米開戦回避に力を尽くせとお言葉があった。ところが、対米開戦してしまった。なぜなのか？

(3)一つは、東条首相誕生で軍部は「対米開戦積極派の東条が首相になったのだから対米開戦必至」と受け止めてしまった。

(4)もう一つは、東条首相は支那撤兵案を来栖特命全権大使に持たせて11月に米国に派遣したが、米国側は対米開戦積極論者の東条の持たせた支那撤兵案に不信感を持ってしまった。このため、米国はそれ以上の譲歩を求めるハル・ノートを突き付けた。

* なぜ真珠湾を攻撃地点としたのか？ 当時、日本は石油を求めて南方進出を最重要と考えていた。その上で、山本五十六は真珠湾の同時攻撃を強力に進言した。理由は日本軍の南方進出、具体的には英領マレー半島上陸を米国太平洋艦隊に横から攻撃されたら南方進出が何か月も遅滞するから。海軍軍令部は山本案に反対していて、英領マレー半島上陸作戦を最重点と考え、米国艦隊がきたらそのときに迎撃すればよいと考えていた。軍令部は山本の「認められなければ辞める」との言葉に負けて真珠湾攻撃を承認。これで二股作戦になってしまった。1941年12月7日深夜から8日早朝にかけて真珠湾とほぼ同時にマレー半島上陸戦開始となった。
* なお、英国への宣戦布告はなかったようです。私の推測ですが、英国はその時点で独・伊と戦争状態にあり、日本は日独伊三国同盟からその戦争に参戦するのは当然のことだったので(集団的自衛権)、宣戦布告しなかったのではないか。これに対し、米国は独・伊と戦争状態になかったので、宣戦布告する必要があったということではないか。ちなみに、米国は真珠湾攻撃を契機として英・ソvs.独・伊の第二次世界大戦に参戦し、これにより戦況は米・英・ソ有利へと傾いていくことになる。
* 1944年2月、毎日新聞・新名丈夫(37歳)の記事が東条首相の逆鱗に触れて、東条は新名を懲罰招集したという事件があった。その記事は「勝利か滅亡か、戦局はここまで来た」「竹槍では間に合わぬ、飛行機だ」「今こそ我々は戦勢の実相を直視しなければならない。戦争ははたして勝っているか」というもの。海軍首脳は懲罰招集に怒り、陸軍に抗議したところ、陸軍は同世代の250人を追加で招集してしまった。新名は三か月ほどで招集解除、他の250人は硫黄島で全員玉砕したとのこと。
* 敗色濃厚の中、1944年6月以降、政府・軍部首脳による東条内閣倒閣運動が動き出すが、東条は倒閣運動の首謀者の一人である岡田啓介(海軍大将、元首相)を呼びつけて「おつつしみにならないとお困りになるような結果を招きますよ」と言った。岡田は後日、「暴力的な脅威を感じた」と言っている。なお、倒閣派とおぼしき者には憲兵がはりついていたとのこと。
* 同年7月3日、近衛は小説家・山本有三(第一高等学校時代の親友)を自宅に招いて東条暗殺を打ち明けたとのこと。これは、山本の小説・「濁流－雑談　近衛文麿」に書かれている。(なぜ近衛が親友の山本に秘密を打ち明けたのか不可解な行動。)
* 海軍少将・高木惣吉も東条暗殺を企てたが、実行日に総辞職したので未遂に終わった。東条の乗るクルマに青酸ガス弾を投げ込む計画であったとのこと。(毒ガス兵器があったことが分かる。)
* 倒閣の理由の一つは嶋田海軍大臣兼軍令部総長の解任にあった。部下が嶋田に戦況不利の報告に行くと「こんな報告を持って来るな」と書類を投げつけた。嶋田は天皇への戦況報告さえも「メーキング」して報告していた。これを問題視した閣僚等は嶋田と口をきかなくなったとのこと。
* 特攻の生みの親は海軍中将・大西瀧治郎と言われているが、これは単純すぎる見方。昭和18年6月に城英一郎大佐が特攻を大西に提案したとき大西は「その時期でない」と却下。昭和19年6月のマリアナ海戦のあとにも岡村大佐からの提案を却下。マリアナ諸島奪還のため天皇＋伏見宮・永野・杉山の三元帥で会議をおこなったが、会議のあとで伏見宮が「特攻でやるよりしょうがない」と言ったことで、海軍軍令部は特攻が認可されたと理解し正式に特攻という体当たり攻撃を採用することとなった。昭和19年10月、この時点では大西も特攻以外に方法はないと考えており、10月26日のフィリピン・レイテ沖海戦で初めて特攻を命令した。大西は終戦の翌日割腹自殺。戦後まで生き残った者たちが自決した大西に責任をなすりつけた印象があり、少々大西が気の毒に思えるとのこと。

以上